

アレキシサイミア傾向と身体の捉え方との関連

松下優衣・石田 弓

Relationship between alexithymic traits and body awareness

Yui Matsushita and Yumi Ishida

アレキシサイミア傾向とは、『体感・感情の認識表現不全』と『空想・内省の不全』という大きく分けて2つの構成概念からなるパーソナリティ特性を指す。先行研究ではアレキシサイミア傾向が身体に対する志向性、意味づけなど、身体の捉え方、体験のされ方における何らかの逸脱と関連することが示唆されているが、実証研究は少ない。そこで、本研究では身体をどのように捉えているのかという観点からアレキシサイミア傾向者の困難について検討することを目的とした。研究1では大学生を対象に質問紙調査を行い、身体をどのように捉えているかを身体感覚の測定を通して捉え、アレキシサイミア傾向との関連を見ることを目的とした。研究2では身体をどのように捉えているかを、バウムテストを用いて無意識的な側面から捉え、その特徴とアレキシサイミア傾向との関連を検討した。その結果、アレキシサイミア傾向と身体の捉え方、体験のされ方にある程度の関連が見られた。そして、アレキシサイミア傾向の下位概念である『体感・感情の認識表現不全』と『空想・内省の不全』で身体の捉え方の質が異なる可能性も示唆された。

キーワード：アレキシサイミア傾向、身体感覚、バウムテスト

問題と目的

アレキシサイミアについて

アレキシサイミア (alexithymia ; 以下, Alex) は、もともと Sifneos (1973) が、自分の感情を適切な言葉で記述することが難しく、直接的で身体的な訴えに終始しているといった、心身症患者に特徴的な認知・感情様式を指して提唱した概念である。Sifneos (1973) の後、Alex 概念は様々な研究によって整理された。後藤ら (1999) は、Alex 概念が、自己の体感や感情を認識し、それを言語化するプロセスの不全を示す『体感・感情の認識表現不全』と、自分の感情を内省的に分析し、空想や想像を行うプロセスの不全を示す『空想・内省の不全』の独立した2つの構成概念から成ることを実証的に示している。Alex は1980年以降の研究で、不安障害、抑うつ障害、身体表現性障害、慢性間接リウマチなどとの関連も報告されるようになった。さらに、Taylor, Bagby, & Parker (1997) は、Alex は身体化症状全般に関係するとしている。また、一木 (2004) によると、非臨床群では23.4%

が Alex と同定されている。現在 Alex は、精神疾患に特有のものではなく、非臨床群にも存在する連続的な特性と捉えられ (Taylor et al, 1997) , 感情の取り扱いにおける困難を特徴とするパーソナリティ特性を表わす「Alex 傾向」として多くの研究がなされている。

アレキシサイミア傾向と身体

そもそも感情は心的状態における変化であるが、身体の生理的な変化を伴って体験されるものでもある (浜, 1981)。また、感情が言葉で表れる過程を観察すると、感情はからだで感じられており、はっきりとした形を持っていない身体的な感覚であることが知られており、Gendlin (1978) はそのような感覚体験過程へのアプローチ法としてフォーカシングを提唱している。これは臨床場面においてクライアントが自分の心あるいは身体に何が起きているのかを明確に言語化したり、説明したりできない場合に、その体験に焦点化することにより自発的な表出を促す技法である。フォーカシングにおける身体とは、感じる場でありながら同時にそれを表現する手段になっているともいえる (松山, 2003)。感情と身体の間がたい関係を考慮すると、感情の取り扱いにおける困難を示す Alex 傾向を理解する上でも、身体的な側面から研究を行うことが必要であると思われる。Alex 傾向に関する研究をみると、これに該当するものがいくつか散見される。

臨床的知見として、池見 (1977) は Alex という概念をわが国に紹介した際、「Alex の強い人たちでは、情動と不離不即の関係にある身体感覚への気づきも抑圧されている」ことを指摘し、「Alex の意味をもう一つ拡大して、『情動と身体への気づきの鈍麻』と解する」ことを提案した。後にそれは失体感症と表現されたが、その定義や評価方法は各研究によって異なり、一貫したものがなく、Alex 傾向との関連についても実証的には未検討であるのが現状である (松下・有村・岡, 2011)。

実証的研究として、青木 (2009) は、Alex 傾向の下位概念のうち『体感・感情の認識不全』が高いほど身体感覚を強度に、有害に、支障あるものとして感じる傾向があることを示し、一方『表層的思考』はそのような身体感覚の過敏性と関連しないことを示した。また、上西 (2010) は、Alex 傾向の高い人は想いを言語化できない時、“からだの感じ”を確かめる傾向や、“もやもや”などの漠然とした身体感覚を抱く傾向が高く、そのような身体感覚を受容し、それを言語や行動に変換する傾向が低いことを示唆している。さらに、脳画像研究においては、身体にまつわる刺激に対して Alex 傾向が高い人の脳の反応性は亢進しており、内的でダイレクトな「身体感覚への過敏」という特性があると解釈されている (守口, 2011)。

以上より、Alex 傾向を身体的側面から検討した研究のほとんどが「身体感覚」に着目していることがわかる。少なくともこれまでの実証研究からは、Alex 傾向は池見 (1977) が示した身体の気づきへの鈍麻とは対照的である身体感覚に過敏な様相と関連しており、さらに、Alex 傾向という困難においては、身体に対する志向性、意味づけが関連している可能性が窺われる。

先行研究の問題点

これまでの研究から、Alex 傾向が身体の捉え方における何らかの逸脱と関連することが考えられる。しかしながら、これまでの実証研究は、「有害」であったり「漠然とした」ものであるという一部の限定された身体感覚との関連のみを検討している点で問題がある。そのように感じられるのは身体をどのように捉えているからなのか、あるいは身体のどのような側面を受け取っているからな

のかについて広い視点から検討することが、Alex 傾向における困難について、身体の捉え方から理解を深めていく上で必要であると思われる。

また、先行研究では Alex 傾向が 2 次元的概念であるという後藤ら (1999) の指摘が考慮されていないという点でも問題があると思われる。特に『空想・内省の不全』について身体的側面から検討した実証研究はない。理論的研究として、Fisher (1973) は空想や想像などの創作活動は、身体感覚や身体の感受性に影響を受けると述べている。また Taylor et al (1997) は、Alexithymic な人々の外面性志向の認知様式では、奇妙な身体感覚に注意が集中し、こうした身体感覚が増幅されたり、誤って解釈されたりし得るので、一層身体的苦痛が強くなったり制御不能の状態になったりすると述べている。このことから、『体感・感情の認識表現不全』と『空想・内省の不全』の独立した 2 つの概念それぞれについて身体的側面から実証的に検討を行い、その相違点や共通点について見ていくことで、Alex 傾向における困難についてより詳細に検討していくことが可能であると思われる。

本研究で身体を捉える方法の検討

身体感覚 Alex 傾向と身体の捉え方について検討する上での一つの観点として、先行研究では身体感覚が用いられてきたが、その意義や妥当性について論じられているとは言えない。そこでまずは身体や身体イメージ、身体感覚に関する研究を概観していく。

Schilder (1935) は、身体イメージとは「我々が我々の心の中で形成する我々自身の像」、言い換えれば、「身体が我々自身に現れるその現れ方」を意味しているとしている。そして、その基底にあるのが身体感覚であるという。また、市川 (1975) によれば、身体の自我に関わりつつ、世界 (外的環境、他者) に関わるあり方の基礎をなすものが身体感覚であるとしている。伊原 (1991) は、自己と身体との関わりを検討するために、身体医学やこれまでの心理学で扱われてきた対象としての身体ではなく、「主体としての身体 (主観身体)」、「自分が生きている身体」を捉える必要があるとし、視覚によらない、普段私達が感じ得る内部感覚に基づく体感によって把握される身体を捉えることを試みている。さらに、成田 (1993) の定義によれば、身体イメージとは「過去から現在に至る身体感覚を基礎として形成された自己身体についての心像に、様々な社会心理的経験が加わって形成」されるものである。以上より、身体感覚は自己が身体をどう捉えているか、体験しているかの基盤をなすものであると考えられていることがわかる。したがって、身体の捉え方を検討する際に身体感覚に着目することは妥当であると思われる。

田所 (2009) は、動作法・フォーカシングなど身体に働きかかせる心理療法における身体感覚の捉え方を手掛かりとし、精神的健康を身体の外的・表面的な側面ではなく、身体感覚のレベルから捉える必要があるとして、身体感覚を捉える両側 SD 法尺度の開発を試みている。この尺度は、これまでの身体イメージ・身体感覚に関する研究を踏まえて作成されており、また、これまでの身体感覚に関する論考に則したものであると考えられるため、本研究の身体感覚の測定に用いることができる。ただし、李 (1990) は、生、死、言葉、身体のように高い両価性を生むと考えられる概念のイメージ測定には、相反する形容詞対を用いるのではなく、単独の形容詞を用いる単独形容詞 SD 法が有効であるということを示している。したがって、本研究では田所 (2009) の身体感覚を捉える両側 SD 法尺度を片側 SD 法尺度として用いる。

バウムテスト 成田 (1993) は、人が自己の身体について心の中に作るモデルとして身体図式があるとし、それは直接体験されない、意識されない過程であるとしている。また、上條 (2009) は、身体機能には内部筋肉や内分泌系、神経系など、意識とは無関係に働く領域があり、心と同様、広大な無意識領域と捉えることが可能であると述べている。このように、我々が自己の身体について無意識的に捉えている側面があることが知られている。Alex 傾向が示す困難をより深く理解していくためには、無意識的に身体をどのように捉えているかを明らかにする必要があると思われる。

身体の捉え方を無意識的側面から検討する際に有効な方法としてバウムテストが挙げられる。バウムテスト (Koch, 1949) は、A4 判の白画用紙に鉛筆で「木」を描かせる描画法である。林 (1977) は、「絵を描くために与えられる画用紙の空間は、調査対象者の生活空間と同一視されることが考えられ、そこに描かれる樹木は、生活空間の位置関係をふくみ、かつ自己像が投影されると考えられる」と述べ、調査対象者の「身体イメージ」そのものが投影されている描画を紹介している。Bolander (1977) は、バウムテストに投影される身体イメージは人物画に比べてより無意識に近いレベルの像であると述べている。山森・橋本・土井 (2001) は、バウムテストには単なる外見的なレベルでの身体像というよりも、まさその人が生きて体験している身体が投影されることを示唆している。康 (2009) はクライアントの身体に投影された病的感覚そのものが表されたとされるバウムテストについて報告している。これらのことから、Alex 傾向における身体との関係について無意識的側面から捉えていく上でバウムテストは有効であると考えられる。

さらに、杉浦・原・鈴木 (2002) は、投影描画法テストバッテリーは、感情を言語化することが困難な Alex を伴う者の病態を、描画に表出された無意識のメッセージを通して、よりよく理解することが可能であるとしている。しかしながら、Alex 傾向に関する描画研究はこれまでほとんどなされていない。したがって、本研究でバウムテストとアレキシサイミア傾向の関連を見ることで、アレキシサイミア傾向に関する描画研究に関して新たな知見を増やすことは意義があると思われる。

本研究の目的

以上より、本研究では Alex 傾向と身体の捉え方、体験のされ方の関連について検討することを目的とする。研究 1 では意識的アプローチとして Alex 傾向と身体感覚との関連を、研究 2 では無意識的アプローチとして Alex 傾向とバウムテストとの関連を検討する。

研究 1

目的

研究 1 では、大学生が身体をどのように捉えているかを、「身体イメージの基盤を成す」(成田, 1993)とされる身体感覚の測定を通して検討し、Alex 傾向との関連を見ることを目的とする。身体感覚の測定には SD 法尺度を用い、身体における肯定的・否定的あるいは両価的な感覚が Alex 傾向とどう関連するのかについて検討する。

方法

調査対象者 大学生を対象に調査を行った。欠損値を除いた最終的なデータ数は 137 名分であった (男性 50 名, 女性 87 名)。平均年齢は 20.71 歳であった ($SD=1.17$, 18~24 歳)。

尺度

1. Alex 傾向を測る質問紙：後藤ら (1999) によって作成された Gotow Alexithymia Questionnaire (Galex) を用いた。16 項目からなり、「1：全く当てはまらない」から「7：かなり当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。『体感・感情の認識表現不全』と『内省・空想の不全』の 2 つの下位尺度からなる 2 因子モデルと、『体感・感情の認識不全』、『感情の表現不全』、『表層的思考』、『空想の欠如』という 4 つの下位尺度からなる 4 因子モデルに対応している。
2. 身体感覚測定尺度：田所(2009)によって作成された身体感覚受容感尺度 (Positive or negative Acceptance of Body Sense scale ; PABS) を本研究では片側 SD 法尺度として改訂し、23 項目の単独形容詞を用いた。「あなたは普段自分の『からだ』をどのように感じていますか」という教示に対し、「1：全く当てはまらない」から「7：かなり当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。

手続き 集団法および宿題調査にて質問紙調査を行った。調査の際は、調査用冊子と、2B の鉛筆、A4 判の画用紙を同封して配った。調査用冊子は、バウムテストの教示、Alex 傾向測定尺度の項目、身体感覚測定尺度の項目、フェイスシート (性別、年齢) から構成された。調査対象者ははじめにバウムテストを行ってから質問項目へ回答するよう求められた。調査は平成 23 年 11 月～12 月に行われた。

結果

各尺度の検討

1. Galex の信頼性の検討：Galex の下位尺度における Cronbach の α 係数を算出したところ、2 因子モデルにおける『体感・感情の認識表現不全』は $\alpha=.76$ 、『空想・内省の不全』は $\alpha=.66$ であった。『空想・内省の不全』において若干低い値をとったものの、.60 を基準とする先行研究もあることから、尺度の使用に耐えうる水準とみなした。
2. 改訂版 PABS の因子構造の確認及び信頼性の検討：まず、フロア効果が見られた項目を除外した 25 項目について因子分析 (主因子法) を行った。スクリープロットや固有値の減衰状況、説明率、解釈可能性から 2 因子を指定し、再度因子分析を行った (主因子法、promax 回転)。そして、因子負荷量が .35 に満たなかった「項目 13：足場のある」を除外してさらに因子分析を行った。その結果、第 1 因子 12 項目、第 2 因子 12 項目、の計 24 項目が採択された (Table 1)。第 1 因子には、身体感覚を表す形容詞のうち、否定的意味合いを持つものが高い負荷量を示していた。そこで第 1 因子を『否定的身体感覚』と命名した。また、第 2 因子には、身体感覚を表す形容詞のうち、否定的意味合いを持つものが高い負荷量を示していた。そこで第 2 因子を『肯定的身体感覚』と命名した。第 1 因子と第 2 因子の因子間相関は $r=-.67$ であった。改訂版 PABS の各下位尺度における内の一貫性を検討するために Cronbach の α 係数を求めたところ、『否定的身体感覚』では $\alpha=.91$ 、『肯定的身体感覚』では $\alpha=.92$ であり、十分な値が得られた。

Alex 傾向と身体感覚との関連

1. 各尺度の相関分析：Alex 傾向尺度と身体感覚尺度の各下位尺度間の関係を明らかにするために、各尺度間の相関係数を算出した (Table 2)。その結果、Alex 傾向尺度における『体感・感情の認識表現不全』と『空想・内省の不全』の間には相関は見られず ($r=-.09$, *n.s.*)、身体感覚尺度における

Table 1 改訂版PABSの因子分析(主因子法, promax回転)結果

項目 番号	内容	F1	F2	共通性
7	不愉快な	.88	.12	.64
22	おびえている	.82	.27	.45
24	拒否された	.81	.03	.62
26	不安定な	.74	.00	.54
8	空虚な	.73	-.01	.55
15	死んだような	.68	-.07	.53
11	不快な	.67	.00	.44
16	きらいな	.60	-.15	.51
19	足場のない	.59	-.10	.38
3	絶望的	.59	-.03	.44
10	生気のない	.49	-.28	.50
1	とけこめない	.48	-.02	.24
9	生き生きした	-.03	.85	.76
23	希望的	-.09	.78	.71
25	充実した	.00	.76	.58
4	新鮮な	.32	.74	.33
18	愉快的	.11	.73	.44
5	すきな	.00	.72	.52
12	受け入れられた	-.04	.69	.51
17	快い	-.11	.66	.55
21	生気のある	-.18	.60	.54
2	安心している	-.27	.46	.44
6	安定した	-.30	.40	.40
14	とけこめる	-.35	.37	.43
13	足場のある	-.27	.27	.24
20	くさった		(フロア)	
因子間相関		-.67		

Table 2 Alex傾向と身体感覚の相関係数

	体感情の認識表現不全	空想内省の不全	否定的身体感覚	肯定的身体感覚
体感情の認識表現不全	-	-.09	.61***	-.55***
空想内省の不全		-	.02	-.12
否定的身体感覚			-	-.68***
肯定的身体感覚				-

*** $p < .001$

Table 3 Alex傾向尺度と身体感覚尺度下位尺度の2要因分散分析

		体感情の認識表現不全		F 値	空想内省の不全		F 値
		高群(n=72)	低群(n=65)		高群(n=75)	低群(n=62)	
否定的身体感覚	平均値	44.64	30.89	53.27***	38.01	38.24	.16
	SD	10.25	11.56		12.78	13.04	
肯定的身体感覚	平均値	45.01	55.68	40.35***	49.25	51.06	2.33
	SD	10.82	8.94		10.36	12.32	

*** $p < .001$

『否定的身体感覚』と『肯定的身体感覚』の間には強い負の相関がみられた ($r = -.68, p < .001$)。Alex 傾向尺度と身体感覚尺度の間の相関については、『体感・感情の認識表現不全』は『否定的身体感覚』 ($r = .61, p < .001$) と強い正の相関が、『肯定的身体感覚』 ($r = -.55, p < .001$) と中程度の負の相関がみられた。『空想・内省の不全』と身体感覚尺度の各下位尺度には相関が認められなかった (各々, $r = .02, r = -.12, n.s.$)。

2. Alex 傾向と身体感覚尺度下位尺度との関連：Alex 傾向の程度によって、身体感覚尺度の下位尺度得点に差があるかどうかを検討するために、本研究ではまず、Galex の各下位尺度得点の中央値以上を高群、未満を低群として群分けを行った。その結果、『体感・感情の認識表現不全』の高群は 72 名、低群は 65 名であり、『空想・内省の不全』の高群は 72 名、低群は 65 名であった。次に、Alex 傾向の程度によって、身体感覚尺度の下位尺度得点に差があるかどうかを検討するために、改訂版 PABS の各下位尺度得点を従属変数とし、『体感・感情の認識表現不全』(高群・低群) × 『空想・内省の不全』(高群・低群) の 2 要因分散分析を行った (Table 3)。その結果、『否定的身体感覚』に関して交互作用は有意でなく ($F(1,133) = .119, n.s.$)、『体感・感情の認識表現不全』の主効果のみが有意であった ($F(1,133) = 53.27, p < .001$)。『体感・感情の認識表現不全』高群は低群よりも、『否定的身体感覚』において高い得点を示した (高群平均値 = 44.64, $SD = 10.25$, 低群平均値 = 30.89, $SD = 11.56$)。『肯定的身体感覚』の高さについても、交互作用は有意でなく ($F(1,133) = .119, n.s.$)、『体感・感情の認識表現不全』の主効果のみが有意であった ($F(1,133) = 40.35, p < .001$)。『体感・感情の認識表現不全』高群は低群よりも、『肯定的身体感覚』において低い得点を示した (高群平均値 = 45.01, $SD = 10.82$, 低群平均値 = 55.68, $SD = 8.94$)。『空想・内省の不全』の主効果は、『否定的身体感覚』に関しても ($F(1,133) = .016, n.s.$)、『肯定的身体感覚』に関しても ($F(1,133) = 2.33, n.s.$) 見られなかった。

考察

研究 1 の目的は、身体をどのように捉えているかを身体感覚の測定を通して捉え、Alex 傾向との関連を見ることであった。以下、Alex 傾向の各下位尺度と身体の捉え方との関連について考察する。

Alex 傾向と身体感覚の関連について

1. 『体感・感情の認識表現不全』の特徴：相関分析および分散分析の結果より、Alex 傾向下位尺度のうち『体感・感情の認識表現不全』の高さは、自身の身体を否定的に感じやすいことと関連することが示唆された。これは、Alex 傾向の高い人は身体を否定的に感じやすいという、青木 (2009) や守口 (2011) の知見と一致する。また、『体感・感情の認識表現不全』の高さは、自身の身体を肯定的に感じにくいことと関連することが、本研究で初めて示唆された。『否定的身体感覚』と『肯定的身体感覚』の間には、強い負の相関がみられたことから、『体感・感情の認識表現不全』の高さにおける『否定的身体感覚』を感じやすい傾向との関連と、『肯定的身体感覚』に気付きにくい傾向との関連はそれぞれ独立したものではない推測される。したがって、『体感・感情の認識表現不全』の高さには、否定的な身体感覚に過敏になることで、肯定的身体感覚に注意が向きにくくなることが関連していると考えられる。『体感・感情の認識表現不全』が高い場合、否定的な身体感覚に目が向きやすいという感覚の偏りがあるため、肯定的な身体感覚も含めた身体全体の感覚を基に感情を同定することが難しい可能性が示唆された。

2. 『空想・内省の不全』の特徴：相関分析においても分散分析においても、Alex 傾向下位尺度のうち『空想・内省の不全』と身体感覚の感じ方との間に明確な関連は示されなかった。これは Fisher (1973) や Taylor et al (1997) の理論的研究とは一致しない結果である。このことから、身体の捉え方を身体感覚という意識的な側面から捉えた場合、『空想・内省の不全』による特徴ははっきりと見られないことが明らかになった。

研究 2

目的

研究 2 では、身体をどのように捉えているかを、バウムテストを用いて身体に対するイメージ像から検討し、その特徴と Alex 傾向との関連を見ることを目的とする。また、これまでほとんど検討されていない Alex 傾向に関する描画研究に対して新たな知見を増やすことを目的とした。

方法

調査対象者 研究 1 と同じ対象者。欠損値を除いた最終的なデータ数は 137 名分であった (男性 50 名, 女性 87 名)。平均年齢は 20.71 歳であった ($SD=1.17$, 18~24 歳)。

手続き 研究 1 と同様の手続きでバウムテストを行った。教示については、中島 (2002) にならい、「実のなる木を 1 本描いてください」とした。

結果

バウムテストの分類 得られたバウムテストについて、バウムテストの基礎的データ収集を目的に作成された佐渡・坂本・伊藤 (2009) の 17 カテゴリー 57 項目からなる読み取り指標を参考に評定した。また、『体感・感情の認識表現不全』の高群・低群、『空想・内省の不全』の高群・低群ごとにバウムテストの各指標における出現度数と出現頻度を算出した (Table 4)。なお、幹先端処理については、藤岡・吉川 (1971) と岸本 (2002) に従い分類した (Table 5)。

Alex 傾向に見られるバウムテストの特徴 バウムテストの各分類指標における出現度数について、『体感・感情の認識表現不全』の高群・低群、『空想・内省の不全』の高群・低群による偏りが見られるかどうかを検討するために χ^2 検定を行った。また、有意な偏りが見られない場合も、群間で出現頻度に 10% 以上の差が見られた指標について検討を行うこととした。以下、独立変数ごとに各指標の度数と出現頻度、 χ^2 検定の結果を示した。

1. 『体感・感情の認識表現不全』におけるバウムテストの特徴 (Table 6~7) : 幹先端処理における「閉鎖型」の処理の仕方として「放散型」に分類された者の出現頻度は低群 (35%) が高群 (25%) よりも多く、「放散型」以外に分類されたものは高群 (75%) が低群 (67%) よりも多かった。「放散型」の出現頻度について、高群・低群による偏りが見られるかどうかを検討するために χ^2 検定を行ったが、有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(1)=1.76, n.s.$)。「葉」の出現頻度は『体感・感情の認識表現不全』高群 (26%) が低群 (12%) よりも多く、「葉なし」に分類されたものは低群 (88%) が高群 (74%) よりも多かった。「葉」の出現頻度について、高群・低群による偏りが見られるかどうかを検討するために χ^2 検定を行ったところ、有意な偏りがみられた ($\chi^2(1)=4.28, p<.05$)。高群・低群にみられた典型的なバウムテストを Figure 1~2 に示した。

Table 4 バウムテストの指標出現度数 (%)

		体感・感情の認識表現不全				空想・内省の不全		合計
		高	低	高	低			
用紙の向き	用紙縦	65 (90)	54 (83)	69 (92)	50 (81)	119 (87)		
	用紙横	7 (10)	11 (17)	6 (8)	12 (19)	18 (13)		
描線	多重線	13 (18)	10 (15)	13 (17)	10 (16)	23 (17)		
	断線	1 (1)	1 (2)	1 (1)	1 (2)	2 (1)		
	一線	58 (81)	54 (83)	61 (81)	51 (82)	112 (82)		
用紙の用途	はみだし	18 (25)	16 (25)	19 (25)	15 (24)	34 (25)		
	幹下緑立	4 (6)	0 (0)	2 (3)	2 (3)	4 (3)		
	紙面内での描写	50 (69)	49 (75)	54 (72)	45 (73)	99 (72)		
幹先端処理	開放型	7 (10)	4 (6)	8 (11)	3 (5)	11 (8)		
	完全開放型	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)		
	閉鎖不全型	1 (1)	2 (3)	3 (4)	0 (0)	3 (2)		
	先端漏洩型	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	冠漏洩型	5 (7)	2 (3)	4 (5)	3 (5)	7 (5)		
	閉鎖型	52 (72)	53 (82)	58 (77)	47 (76)	105 (77)		
	冠型	31 (43)	27 (42)	30 (40)	28 (45)	58 (42)		
	放散型	18 (25)	23 (35)	26 (35)	15 (24)	41 (30)		
	基本型	3 (4)	1 (2)	2 (3)	2 (3)	4 (3)		
	その他の閉鎖型	0 (0)	2 (3)	0 (0)	2 (3)	2 (1)		
その他	13 (18)	8 (12)	9 (12)	12 (19)	21 (15)			
幹	一線幹	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	幹下直	0 (0)	1 (2)	0 (0)	1 (2)	1 (1)		
	幹上直	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	基部の拡がり	65 (90)	60 (92)	68 (91)	57 (92)	125 (91)		
	幹その他	7 (10)	4 (6)	7 (9)	4 (6)	11 (8)		
幹表面の描写	幹表面の描写あり	37 (51)	35 (54)	39 (52)	33 (53)	72 (53)		
	幹表面の描写なし	35 (49)	30 (46)	36 (48)	29 (47)	65 (47)		
枝本数	枝あり	50 (69)	44 (68)	53 (71)	41 (66)	94 (69)		
	枝一本	3 (4)	0 (0)	2 (3)	1 (2)	3 (2)		
	枝二本～三本	8 (11)	10 (15)	9 (12)	9 (15)	18 (13)		
	枝四本以上	39 (54)	34 (52)	42 (56)	31 (50)	73 (53)		
枝構造	枝なし	22 (31)	21 (32)	22 (29)	21 (34)	43 (31)		
	全一線枝	2 (3)	1 (2)	2 (3)	1 (2)	3 (2)		
	全二線枝	46 (64)	41 (63)	49 (65)	38 (61)	87 (64)		
	一・二線枝混合	2 (3)	2 (3)	2 (3)	2 (3)	4 (3)		
枝分枝	枝なし	22 (31)	21 (32)	22 (29)	21 (34)	43 (31)		
	分枝あり	30 (42)	22 (34)	25 (33)	27 (44)	52 (38)		
	分枝なし	42 (58)	43 (66)	50 (67)	35 (56)	85 (62)		
根本数	根あり	34 (47)	28 (43)	38 (51)	24 (39)	62 (45)		
	根一本	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (2)	1 (1)		
	根二本～三本	3 (4)	3 (5)	3 (4)	3 (5)	6 (4)		
	根四本以上	30 (42)	25 (38)	35 (47)	20 (32)	55 (40)		
根構造	根なし	38 (53)	37 (57)	37 (49)	38 (61)	74 (54)		
	全一線根	0 (0)	1 (2)	1 (1)	0 (0)	1 (1)		
	全二線根	33 (46)	26 (40)	35 (47)	24 (39)	59 (43)		
	一・二線根混合	1 (1)	1 (2)	2 (3)	0 (0)	2 (1)		
樹冠	根なし	38 (53)	37 (57)	37 (49)	38 (61)	75 (55)		
	樹冠あり	62 (86)	59 (91)	68 (91)	53 (85)	123 (90)		
	球型	2 (3)	5 (8)	6 (8)	1 (2)	7 (5)		
	雲型	49 (68)	46 (71)	51 (68)	44 (71)	95 (69)		
実	その他の型	11 (15)	8 (12)	11 (15)	8 (13)	21 (15)		
	樹冠なし	10 (14)	6 (9)	7 (9)	9 (15)	16 (12)		
	実あり	67 (93)	58 (89)	67 (89)	58 (94)	125 (91)		
葉	実一種	66 (92)	55 (85)	63 (84)	58 (94)	121 (88)		
	実多種	1 (1)	3 (5)	4 (5)	0 (0)	4 (3)		
	実なし	5 (7)	7 (11)	8 (11)	4 (6)	12 (9)		
花	葉あり	19 (26)	8 (12)	12 (16)	15 (24)	27 (20)		
	葉なし	53 (74)	57 (88)	63 (84)	47 (76)	110 (80)		
地平	花あり	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	花なし	72 (100)	65 (100)	75 (100)	62 (100)	137 (100)		
風景・付属物	地平あり	25 (35)	28 (43)	29 (39)	24 (39)	53 (39)		
	地平なし	47 (65)	37 (57)	46 (61)	38 (61)	84 (61)		
風景・付属物	風景・付属物あり	8 (11)	7 (11)	9 (12)	6 (10)	15 (11)		
	風景・付属物なし	64 (89)	58 (89)	66 (88)	56 (90)	122 (89)		

Table 5 幹先端処理によるバウムテストの類型

バウムテスト類型	説明
開放型	
完全開放型	幹先端処理による輪郭閉鎖を完全に放棄したのか、あるいはまったく無関心とも受け取れる。
先端漏洩型	幹の先端、もしくは枝先が先細りになって閉じようとはしているが、完全に閉じていないために、幹のない空間が外界と交通している。
冠漏洩型	樹冠が描かれているが、その輪郭に隙間が2か所以上あるため、幹の内空間が外界に漏洩している。
閉鎖不全型	上記以外の方法で先端を閉じようと何らかの努力をしているが、うまくいっていない。
閉鎖型	
冠型	幹先端の処理を放棄して、樹冠の輪郭を描くことで全姿の輪郭を閉じている。
放散型	幹先端の処理にあたって、幹の先端をそのまま枝分かかれさせている。
基本型	幹の先端が細くなってそのまま閉じ、幹の上部には同じように描かれた枝がおおむね互生している。
その他の閉鎖型 上記以外の閉鎖型。	
その他	
一線幹とか、全体が描かれていなくて、開放・閉鎖の区別ができない	

Table 6

『体感・感情の認識表現不全』の各群における「放散型」の度数(%)と χ^2 検定の結果

バウム指標	体感・感情の認識表現不全				χ^2 値	p値
	高群		低群			
放散型	18	(25)	23	(35)	1.76	.19
その他	54	(75)	42	(65)		

Table 7

『体感・感情の認識表現不全』の各群における「葉」の度数(%)と χ^2 検定の結果

バウム指標	体感・感情の認識表現不全				χ^2 値	p値
	高群		低群			
葉あり	19	(26)	8	(12)	4.28	.04
葉なし	53	(74)	57	(88)		

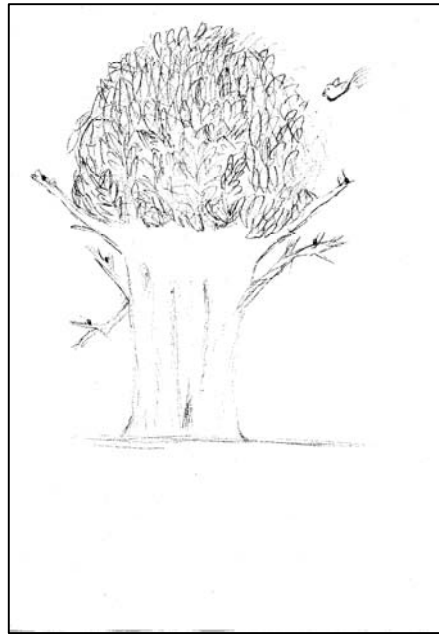
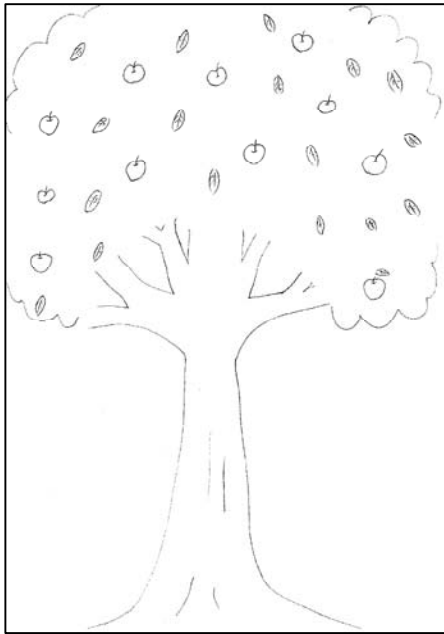


Figure 1 『体感・感情の認識表現不全』高群の典型的なバウムテスト

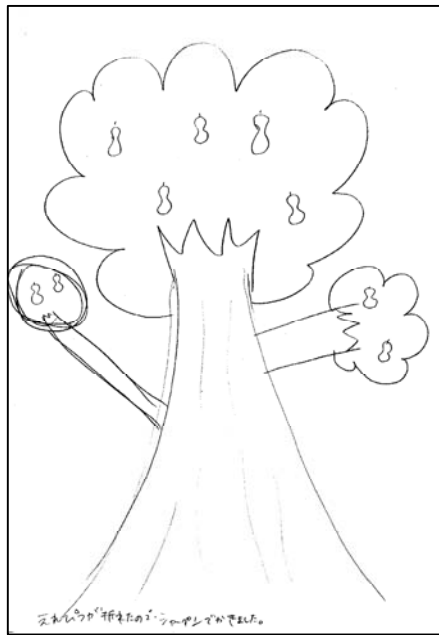
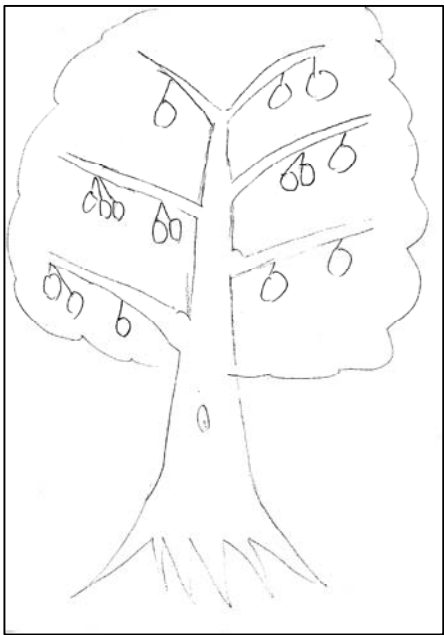


Figure 2 『体感・感情の認識表現不全』低群の典型的なバウムテスト

2. 『空想・内省の不全』各群にみられるバウムテストの特徴 (Table 8～12): 「用紙の向き」として「用紙縦」に分類された者の出現頻度は高群 (92%) が低群 (81%) よりも多かった。「用紙横」に分類されたものは低群 (19%) が高群 (8%) よりも多かった。「放散型」の出現頻度について、高群・低群による偏りが見られるかどうかを検討するために χ^2 検定を行ったところ、偏りに有意傾向がみられた ($\chi^2(1)=3.83, p<.10$)。Table 9 より、幹先端処理における「閉鎖型」の処理の仕方として「放散型」の出現頻度は『空想・内省の不全』高群 (35%) が低群 (24%) よりも多かった。「放散型」以外に分類されたものは低群 (76%) が高群 (65%) よりも多かった。「放散型」の出現頻度について、高群・低群による偏りが見られるかどうかを検討するために χ^2 検定を行ったが、有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(1)=1.78, n.s.$)。枝の処理の仕方として「分枝あり」に分類された者の出現頻度は低群 (44%) が高群 (33%) よりも多く、「分枝なし」に分類されたものは高群 (67%) が低群 (56%) よりも多かった。「枝分枝」の出現頻度について、『空想・内省の不全』高群・低群による偏りが見られるかどうか検討するために χ^2 検定を行ったが、有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(1)=1.50, n.s.$)。「根」の出現頻度は高群 (51%) が低群 (39%) よりも多く、「根なし」に分類されたものは低

Table 8

『空想・内省の不全』の各群における「用紙の向き」の度数(%)と χ^2 検定の結果

バウム指標	空想・内省の不全		χ^2 値	p 値
	高群	低群		
用紙縦	69 (92)	50 (81)	3.83	.05
用紙横	6 (8)	12 (19)		

Table 9

『空想・内省の不全』の各群における「放散型」の度数(%)と χ^2 検定の結果

バウム指標	空想・内省の不全		χ^2 値	p 値
	高群	低群		
放散型	26 (35)	15 (24)	1.78	.18
その他	49 (65)	47 (76)		

Table 10

『空想・内省の不全』の各群における「枝分枝」の度数(%)と χ^2 検定の結果

バウム指標	空想・内省の不全		χ^2 値	p 値
	高群	低群		
分枝あり	25 (33)	27 (44)	1.50	.22
分枝なし	50 (67)	35 (56)		

Table 11

『空想・内省の不全』の各群における「根」の度数(%)と χ^2 検定の結果

バウム指標	空想・内省の不全		χ^2 値	p 値
	高群	低群		
根あり	38 (51)	24 (39)	1.96	.16
根なし	37 (49)	38 (61)		

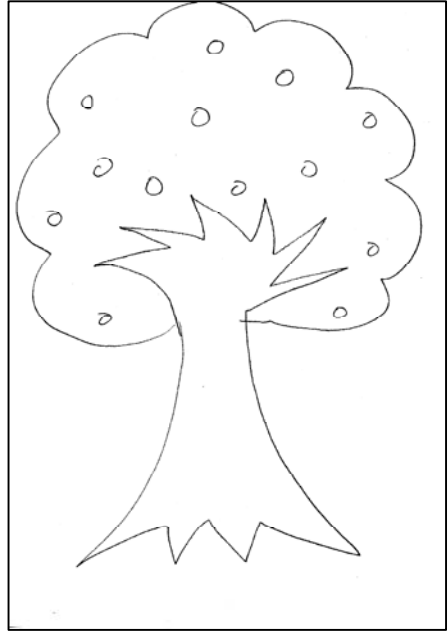
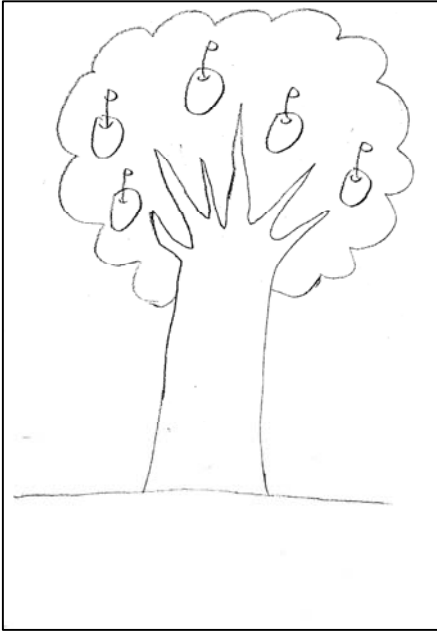


Figure 3 『空想・内省の不全』高群の典型的なバウムテスト

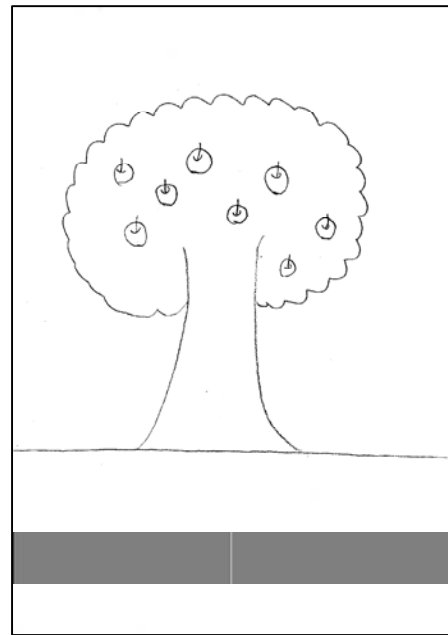
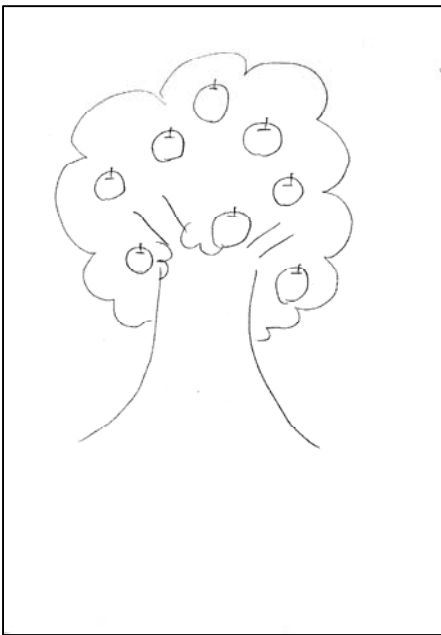


Figure 4 『空想・内省の不全』低群の典型的なバウムテスト

群 (61%) が高群 (49%) よりも多かった。「根」の出現頻度について、高群・低群による偏りが見られるかどうかを検討するために χ^2 検定を行ったが、有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(1)=1.96$, *n.s.*)。高群・低群にみられた典型的なバウムテストを Figure 3, 4 に示した。

考察

研究2の目的は、身体をどのように体験しているかを、バウムテストを用いて捉え、その特徴と Alex 傾向との関連を見ることであった。以下、Alex 傾向の下位尺度ごとに検討した後、そこでの共通点と相違点も含めて Alex 傾向と身体の捉え方の関連について考察する。また、Alex 傾向をアセスメントするツールとしてのバウムテストの有用性についても考察する。

『体感・感情の認識表現不全』の特徴 『体感・感情の認識表現不全』高群は低群に比べて幹先端の「放散型」が少なく、「葉」が描かれることが多かった。岸本 (2002) は、幹先端処理はバウムを描く際に最もエネルギーを要する部分であり、「閉鎖系」の各類型の中では「冠型」、「基本型」、「放散型」の順に幹先端処理は複雑となるので、投入されるエネルギーもこれに比例して多くなると述べている。また、「放散型」のようなエネルギーを要する先端処理が避けられていることは、心的エネルギーの低下、あるいは葛藤処理能力の低下を示唆するとしている。さらに、松下 (2006) は「放散型」の読み取りについて、幹から伸びた枝が枝自身によって閉じられていること、しかし幹先端の一点から一気に枝分かれしていることから、自分の内に突き上げてくるものがあるが、それは未分化なままであり、自分を振り回す衝動として体験されるために一度に放出してしまうところがあるのではないかと述べている。松下 (2006) はさらに、自分でも把握しきれない未分化な感情や自己感は、自分のものとしては感じられにくいために、衝動のような、自分の中からくるものであるのに、あたかも外からくるものに突き動かされるような、自分で自分をコントロールできない感じがつきまとうのではないかとしている。

また、「葉」について高橋・高橋 (1986) は、葉は樹木と外界との間の緩衝となる部分であり外界と直接接触する部分であるから、i) 感覚器官、ii) 精神的エネルギーの強さ (若さ)、iii) 外界への好奇心と外向性、iv) 外界からの被影響性、v) 自己の保護、vi) 外見や装飾を象徴するとしている。

『体感・感情の認識表現不全』高群は幹先端処理の「放散型」が少なかったことから、衝動といった未分化な感覚を抱えてそれに圧倒されていたり、それを一気に放出するといったことは少ないと思われる。しかし、「葉」が描かれることが多かったことから、外界に関心が向きやすいことや外界からの影響を受けやすいことが推察され、外界に対して敏感であると考えられる。『体感・感情の認識表現不全』における、自分の感情や身体感覚に気づいたり区別したりすることの難しさや、感情を表現することの難しさの背景には、外界に対して敏感であるために、自身のからだの感覚に焦点を当てたり、感覚を感情として意味づけたりすることにエネルギーを向けにくい特徴があると考えられる。

『空想・内省の不全』の特徴 『空想・内省の不全』高群は低群に比べて、バウムが描かれる用紙の向きとして「横」が少なく、幹先端の「放散型」や、枝の「分枝なし」が多く、また「根」が描かれることも多かった。

まず「用紙の向き」について、本来バウムテスト実施時には検査者が用紙を被験者に対し縦長の向きにして配布するが、本研究では封筒に入った用紙を調査対象者自身を取り出す方式をとった。佐渡ら (2009)によると、検査者が用紙を被験者に対し縦長の向きにして配布した場合に、用紙を横にしてバウムを描く者の出現率は1.5%ときわめて少なかった。しかし、本研究で用紙を横にしてバウムテストを描いた調査対象者は13%見られたことから (Table 4)、本研究での手続きが「用紙横」を増加させている可能性も考えられる。よって、「用紙の向き」に関する『空想・内省の不全』の特徴についての考察は控えることとした。

枝の「分化」について、奥田 (2005) は幹の内実・エネルギーを何らかの方向付けをして処理することであり、自己の形成やアイデンティティ獲得感に関わるものであるとしている。山川 (2005) は「分化」を幹のエネルギーをそのまま伸ばしていくことであり、具体性・直接性による幹への対処であるとし、松下 (2005) は自分をどうつかむかということと関係していると述べている。

「根」については、一般に根の処理は、安定性をいかに表現するかということと関わっている (山森ら, 2001)。また、Bolander (1999) は、根は本能と無意識領域を表すとしている。山森ら (2001) は、根が描かれることについて、土の中という目に見えない部分までも描いていることから、無意識的側面まで統制しようとするかのような統制過剰的側面も感じさせるとしている。

以上のことと、前項で既述した「放散型」の特徴を併せると、『空想・内省の不全』高群について以下の特徴があると考えられる。まず、『空想・内省の不全』高群は「根」が描かれることが多いことから、自分の感覚に目を向けることはできているが、一方でそれを統制しようという側面もあると思われる。また、「放散型」が描かれることが多く、枝の「分枝あり」が少なかったことから、自分の中に沸き起こる感覚はあるものの、それがどういう気持ちなのか意味づけていくことが難しく、衝動といった未分化な感覚を抱えやすいと思われる。また、未分化な感覚は自分のものとしては感じられにくいいため、あたかも外からくるものに突き動かされているような感じを持っているのではないかと推測される。すなわち、『空想・内省の不全』が高い人は、自分の感覚が未分化なものとして体験されているために、空想・想像といったより分化したものへと結びつけることが難しいと考えられる。また、『空想・内省の不全』が高い人は、その未分化な感覚を自分のものとして感じるものが難しく、その原因を外的事象に見出しやすいために、自分の内面には目が向きにくいものと考えられる。

総合考察

本研究の成果

研究1・2より、Alex 傾向と身体の捉え方、体験のされ方にある程度の関連が見られ、身体的側面から Alex 傾向について検討していくことの有用性が示された。また、Alex 傾向の低位概念である『体感・感情の認識表現不全』と『空想・内省の不全』で身体の捉え方の質が異なることも示唆された。

『体感・感情の認識表現不全』については、研究1より、否定的な身体感覚に過敏になることで、肯定的な身体感覚に注意が向きにくくなることによる、全体的な身体感覚への気づきの低下が関連

していると考えられた。また、研究2より、『体感・感情の認識表現不全』が高い人は外界の刺激に対して敏感であるため、自身の身体感覚に焦点を当てたり、意味づけたりすることにエネルギーを向けにくいことが推察された。これらのことから、『体感・感情の認識表現不全』が高い人は、外的で否定的な意味合いを持つ感覚に過敏であることが考えられ、そのために肯定的感覚を感じにくく、また自分の内にある感情を捉え、表現することが難しいと考えられる。

『空想・内省の不全』については、研究1では身体の捉え方、体験のされ方において明確な結果は得られなかった。しかし、研究2より、『空想・内省の不全』が高い人は、自分の中に沸き起こる感覚はあるものの、それは未分化なままであり、感覚を自分のものとして感じるのが難しく、その意味について考えたり、空想・想像といったより分化したものへと結びつけるのが難しいと考えられた。また、『空想・内省の不全』と身体の捉え方について検討するためには、無意識的側面から捉える必要性が示唆された。

本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題について以下3点あげる。まず1点目として、本研究は一般の大学生が対象であり、臨床的な問題を抱えている人々ではなかった。そのため、本研究の知見をそのままAlex傾向が高い人々の理解に用いることには慎重にならなければならない。また、研究2で明確な結果が得られなかったことも、対象者が臨床的な問題を抱えている人々でなかったことが一因と考えられる。今後は臨床的な問題を抱えている人々に対する調査を行い、Alex傾向の特徴を明確にしていく必要があると思われる。2点目として、本研究のデータ収集方法の限界がある。集団法と宿題調査を用いてデータを収集したが、バウムテストを宿題調査で行ったため用紙の向きを統制できないなど条件統制の点で問題がある。今後は個別法・集団法を用いて条件を統制した上で調査を行うことが求められる。3点目として、Alex傾向を捉える上での方法の問題が考えられる。本研究では自己記入式の質問紙を用い、意識的側面からAlex傾向を捉えたが、意識的アプローチと無意識的アプローチを用いた場合とで捉えられるAlex傾向の側面に違いがあるとする先行研究もある(一木, 2006)。したがって、今後はAlex傾向の特徴について検討する際、投映的手法を用いて無意識的な領域から捉えていく必要性もある。

引用文献

- 青木 聡 (2009). アレキシサイミアと身体感覚に対する過敏性の関連. 身体的愁訴に対する心理臨床的アプローチの方向性について 大正大学研究紀要, 人間学部・文学部, 94, 1-12.
- Bolander, K. (1977). *Assessing personality through tree drawing*. New York: Basic Books Inc. 高橋依子 (訳) (1999). 樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ出版
- 大辞泉 (増補・新装版) (1998). 松村 明 (監) 小学館『大辞泉』編集部 (編) 小学館
- Fisher, S. (1973). *Body Consciousness. you are what you feel*. New Jersey: Prentice-Hall. 村山久美子・小松啓 (訳) (1979). からだの意識 誠信書房
- Gendlin, E. T. (1978). *Focusing*. New York: Bantam Books. 村上正治・都留春夫・村瀬孝雄 (訳) (1982). フォーカシング 福村出版

- 後藤和史・小玉正博・佐々木雄二 (1999).アレキシサイミアは一次元的特性なのか？—2 因子モデル
アレキシサイミア質問紙の作成 筑波大学心理学研究, **21**, 163-172.
- 浜 治世 (1981). 現代基礎心理学 8 動機・情緒・人格 東京大学出版
- 林 勝造 (1977).「身体イメージと描画」——人物画と樹木画を中心として—— 教育と医学, **25** (6),
40-47.
- 藤岡喜愛・吉川公雄 (1971). 人類学的に見た, バウムによるイメージの表現 季刊人類学, **2**(3),
3-28.
- 池見西次郎 (1977). 心身症の新しい考え方——神経症・不定愁訴との鑑別—— 医事新報, 2775,
3-8.
- 伊原千晶 (1991). 自己及び他者に対する関わりのあり方と身体イメージとの関係についての横断的
研究 京都大学教育学部紀要, **38**, 239-253.
- 市川浩著 (1975). 精神としての身体 勁草書房
- 一木仁美 (2004). 臨床群におけるアレキシサイミア特性と想像の特徴についての研究——非臨床群
との比較検討より 日本保健医療行動科学会年報, **19**, 105-120.
- 上條史絵 (2009). 心理臨床における身体自我考察の試み 大阪大学教育学年報, **14**, 63-75.
- 康 智善 (2009). 心理療法関係における共通言語としての身体—「言語の身体性」とイメージ 伊
藤良子・大山泰宏・角野義弘 (編) (2009). 心理臨床関係における身体 創元社 pp. 22-31.
- 岸本寛史 (2002). バウムの幹先端処理と境界脆弱性症候群 心理臨床学研究, **20** (1), 1-11.
- Koch, K. (1949). *Der Baum-Test*. Hans Huber.
- 李 敏子 (1990). 生, 死, 言葉, 身体 of イメージ—青年を対象として 心理學研究, **61**(2), 79-86.
- 松下姫歌 (2005). 精神病院での心理臨床におけるバウムの意味について 山中康裕・皆藤 章・角
野善宏 (編) (2005). バウムの心理臨床 創元社 pp.222-238.
- 松下智子・有村達之・岡 孝和 (2011). 失体感症に関する研究の動向と今後の課題—文献的検討 心
身医学, **51**(5), 376-383.
- 松山真弓 (2003). 感情体験の身体的側面からの基礎研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, **49**,
409-421.
- 守口善也 (2011). アレキシサイミアの脳画像研究 (シンポジウム.Neuroimaging の新展開,2010 年,第
51 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会(仙台)) 心身医学, **51**(2), 141-150.
- 中島ナオミ (2002). わが国におけるバウムテストの教示 臨床描画研究, **17**, 177-189.
- 成田善弘 (1993). 心身症 講談社現代新書
- 奥田 亮 (2005). 幹先端処理において体験されうること—幹先端が描き手に何を引き起こすか 山
中康裕・皆藤 章・角野善宏 (編) (2005). バウムの心理臨床 創元社 pp. 182-197.
- 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 (2009). バウムテストの幹先端処理に関する基礎的研究—大学生の
バウム画より 心理臨床学研究, **27**(1), 95-100.
- Shilder, P. (1935). *The Image and Appearance of the Human Body*. New York. International University
Press. 稲永和豊 (監) (1987). 身体 of 心理学—身体 of イメージとその現象 星和書店

- Sifneos, P. E. (1973). *The prevalence of 'alexithymic' characteristics in psychosomatic patients.* *Psychotherapy and Psychosomatics*, **22**, 255-262.
- 杉浦京子・原 信一郎・鈴木康明 (2002). 心身症患者 (アトピー性皮膚炎・気管支喘息患者) の投影描画法テストの検討 日本芸術療法学会誌, **33** (1), 5-13.
- 田所まり子 (2009). 身体感覚受容感尺度作成の試み—尺度の開発と信頼性・妥当性の検討— 健康心理学研究, **22** (1), 44-51.
- 高橋雅春・高橋依子 (1986). 樹木画テスト 文教書院
- Taylor, G. L., Bagby, R. M., & Parker, J. D. A. (1997). *Disorders of affect regulation. Alexithymia in medical and Psychiatric illness.* Cambridge. Cambridge University Press. 福西勇夫・秋元倫子 (訳) (1998). アレキシサイミア 星和書店
- 上西裕之 (2010). 日常生活におけるフォーカシング的態度と Alexithymia 傾向との関連—FMS-R と TAS-20 を用いて— 関西大学心理相談室紀要, **12**, 57-64.
- 山川裕樹 (2005). 幹先端処理の重要性 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) (2005). バウムの心理臨床 創元社 pp. 222-238.
- 山森路子・橋本尚子・土井真由子 (2001). バセドウ病患者のバウム・テスト 平成 11・12 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 課題番号 11410031. バセドウ病患者の人格構造に関する研究 (研究代表者山中康裕), 18-36.